

ISXD 仮面ライダーになった男 リメイク

刹那クロスロード

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

前の作品のリメイクです

グチャグチャなので作り直します

目次

第1話	1
2話	5

## 第1話

ある日僕は突然死んだ

死に方はたぶん自殺

あの世界を生きるのが嫌になったし体にかかる重力がないからあれから死んだんだと思う

とりあえず自己しよう

俺の名前は橘 翔一 普通の高校三年生だった

進路もあと少しで決まりそうだったんだけど少し問題があつてやってしまった

「てか、ここどこ?！」

「やあくやあくはじめまして」

(えーつと…誰?)

「私はねー神様なんだよ!!」

(神様っているんだ。信仰心とかないから気にしてなかつけど)

「あーつと、ひとつ聞いていいですか?」

「なんだい!」

「ここはどこ?」

「知りたい?」

「とりあえずは…」

「ここはね、転生するための場所なんだよ!そしてあなたはその転生者に、選ばれたの!」

「何それ…それってなにかによつて決められたのか…?」

「偶然でもあるし必然でもある!」

(これはよくわかんないな)

「あなたにお願いがあるの!」

「お願い?」

「あら?あんまり驚かないんだね!」

(なんと無くそんなかんじの本は読んでたから…)

俺の世界は簡単に言えばみんなが何かしらの能力を持っている

もつと簡単に言えばと○るみたいなかんじ

「お願い聞いて貰えるってことでいいんだよね？」

「うんまあ…」

(俺は期待なんかしない期待しても裏切られるから)

「そんなことないさ！転生ってのは知ってるんだよね！」

「別の世界にいくってことですよね？」

「そそ、正解！いつてもらいたいの？ISなんだよ！」

「ISってインフィニットストラトスだよね？主人公が唐変木とかの？」

「またまた正解〜！」

そう言えば最近IS (インフィニットストラトス) 読んでたな！

なんだろうなにか腑に落ちないものがある

「その世界にいくけど欲しいものある?！」

(よく言う特典ってことだよな?)

「欲しいもの…まあ、その世界を壊さない程度に力を与えることは可能だよ！」

「世界を壊さない程度って…まあそうだよな」

「壊したら大変なことになるからね！」

(だったら)

「仮面ライダーと才能、それと身体を鍛えただけ強くなる身体能力がほしい」

「大雑把のもあるけど…よしできた！でも、なんで鍛えたりして強くなろうとするの？もとかからハイスペックにすればいいじゃん？」

「意外にできるもんなんだね。それでもいいけど、努力しないでその力をてにいれたらなにか違う感じがして」

「神様だもん！」

「神様か…なにも信仰してなかった俺からすればなんとも思わないけど、その手の宗教の人は喜ぶだろうな！」

「そうだね。でも、崇拜されない神もいるんだよ！」

「そうなんだ。日本だと八百万の神とかあるからそうでもないと思っただ」

「日本だけだけどね！」

「ありがと神様。もう一度人間として過ごさせてもらって」

「ううん！あなたの心と考えがよかったから選ばれたんだよ！」

「そっか…心か…」

「こんな薄汚れた心を誰かが評価してくれたのか

「そう言えばお願いってなに？」

「とある平行世界の境界線となる壁を壊しちやって…」

「そういう世界があるんじゃないかって？」

「本来はあることにはあるけど、この世界は私のミスで合わさってしまっただの…」

神様でもミスはするもんな

「ハイスクールDXDって知ってる？」

「少しだけなら知ってるけど？」

「その世界と合わさったの」

ん？

神話と超科学の世界が融合？

「それって大丈夫なの？」

「平行世界自体はあるけど、正規の歴史じゃないから全く読めないの…」

なるほど…

とりあえず正規ルートじゃないけどルート通りであると考えておこう

「わかった、なんとかやるよ」

「ありがと翔一君」

新しい場所での新しい人生

誰も僕のこと知らない

僕も周りの人は知らない

そんな新しい人生

(まったく、俺のことも忘れるなよ)

「ああ、そうだったね僕。これからもよろしくいこうよ」

(ああ、そうだけ相棒)

じゃあいこうか、僕たちの第二の人生を

「思いも考えも変えず、あの人たちのように！変身!!」  
「よろしくお願いいたします！」  
そして、その言葉とともに体は光の粒子になっていった

## 2話

また朝だ

太陽の日が眩しい

そろそろ起きないと…

「ドアが…高い…?」

(ん?…僕の手が小さい…そうか僕は小さくなったのか!!)

なるほどと思いい部屋を見渡した

そこは寝室で家具やなんやらが揃っていた

部屋の扉を開けると左に階段が見えた

ここはアパートやマンションではないみたいだ

その階段を降り、辺りを見渡すと玄関が見えた

ここは一階で、寝室は二階のようだ

僕は、おもむろに階段すぐの部屋にはいるとそこはリビングで、テ

レビヤソファア、テーブル等の家具は揃っていた

ふと机をみると鍵と紙置いてあった

(日常生活で必要なものはすべて揃ってるようだな)

「そうみたいだね。手紙あるから読んでみようよ!」

ペラ

『翔一君へ

こんにちは。この手紙を見てるってことは転生に成功したみたいだね!よかったよかった!そこにある鍵はお願いされた特典の部屋の鍵だから自由に出入りできるよ。』

と紙に書いてあった

「…えつと…部屋の場所は…」

(探すか…)

く数分後

「まさかここにあるとは…」

ここというのはクローゼットの奥だった

「中を見ようかな!」



ワクワク

カチャ

「こ……こは……」

中にはたくさんのベルトからバイクなどの乗り物があった

「仮面ライダーとは言ったがここまでとは……」

とりあえず中をみたわけだがドライブのトライドロロンまである

「あつ！ベルトさん」

『君は誰だ』

そりゃ知るんけないか

「僕の名前は橘翔一よろしく」

『んくよくわからないがよろしく』

(挨拶はあとにしてとりあえずここの地形を把握をしないと)

「なるほどここは駒王町なのか…はあ…」

(他には…)

「ISはまだ発表されていないみたいだよ」

(そっか、まだ出ていないのなら、鍛えるぞ！)

「えっ!?なんで!?!」

(相棒の体を使うんだから)

「そうだったね…」

それからの日々は筋トレやランニングの毎日だった

〜一年後〜

(小学校に通ってるんだよなあ)

そう、僕は小学三年生である

「はあー」

神から才能をもらっているけど、今一つ何に使おうかわからないんだよね

(別に今すぐについて訳でもないだろ?)

「そうだけどさく」

『またもう一人の自分と話しているのかい?』

「うん…あの部屋にある、ベルトどうしようかなって」

『どうするとは?』

「たくさんベルトがあっても使えなかったら意味がないよね」

『(うーん…)』

やはり…宝の持ち腐れみたいな

その頃ある二匹の猫が傷を負いながらも逃げていた

「ああ…外の空気が気持ちいいね」

『そうだな』

(えっ!?ベルトさんベルトなのにわかるのか!?)

行き詰まったから僕らは外に散歩に出た

いろいろ案が出たけど、ピンと来るものがなかった

誰か!!誰かたすけてー!!

(ん?相棒今のは!!)

「うん、ベルトさん急ごう!」

『悲鳴だな…急ごう翔一』

そして僕らは走り出した

現場につくと

「わっ猫だ!!怪我してるよ!」

『大丈夫だ翔一気を失っているだけのようだ』

(ほっ…良かった…)

「あっベルトさん車呼んでトライドロンあったよね!」

『わかった、common trydron』

ベルトさんにトライドロンを呼んでもらい怪我の具合を確認した  
致命傷はないが、わざと急所を外しているように見えた

(相棒、何か気配を感じる…来るぞ！)

『どうした翔一』

「何か来る」

ブウウウウン

『トライドロンが来たぞ速く乗るんだ』

「うん」

僕は猫を乗せ自宅に向けて出発した

(くくく、勘のいい奴よ)

時は過ぎ夕方

僕は猫の看病をしていた

傷が多数たつたため包帯などの処置をした

起きたときのためにご飯の用意などしていた

ベルトさんにも手伝ってもらいいろいろと用意が完了してきてい  
た

「…ニヤ…フニヤ？」

「あつベルトさん起きたよ！」

黒猫がおきた

『そうか今いく』

(ひとまず安心…だといいいけど。)

「フシャー！！」

「すぐく毛を逆立てて警戒してるよ!？」

手を近づけると引っ掛かれた

痛い

「シャー！！」

「まあご飯食べよ！おなか空いてない？」

「ニヤア!! 『グウウウウウウ』／／／」

「ほら食べて！お腹が空いたらなんとやらだよ！あ、でも猫だから言葉はわかんないか」

黒猫は小さく頷いた

「ニア…」

黒猫はちよこちよここと食べ始めた

(散歩して今の状況なんだが、何かいい案思い付いたか?)

「あれ？あつ忘れてた!!」

『どうした？翔一?』

「僕たち散歩に出た理由って行き詰まって出たのになんの案も出なかった！あーどうしよう!?!」

『まだ時間があるだろう。落ち着くんのだ』

(落ち着け相棒！)

一人でてんやわんやしている僕を黒猫は首をかしげてみている

「なにしてるにや?」

「なにしてるって……え?」

『今何か聞こえなかったかい?』

そう、ここにいるのは僕とベルトさんに黒猫

「何があったのにや?」

首がブリキの人形のようにギギギと擬音が似合いそうに動いた

「今この黒猫喋らなかった…?」

(たしかに喋ったな)

『たぶん…喋ったんじゃないのかな?』

「喋ったらダメなのかにや?」

喋ったらダメなんじゃなくて何で喋れるのかってことなんだよ

「私が喋れるのは、猫又だからにや!」

(相棒、猫又ってなんだ?)

「猫又って言うのは、日本の民間伝承や古典の怪談、随筆などにあるネコの妖怪で、猫又になる方法は2通りあったはずだよ」

『たしかにその説であっているが、まさか本物を見ることができるものとは思わなかったねえ!』

(そんなにすごいのか?)

もう一人の僕と反対だからね

「さて、今後のことなんだけど、追われてるよね？」

『この猫又は追われているのか？』

「うん、さっきの時点でもう一人の僕が気づいてたんだ。たぶん、この場所もばれてると思う」

「なら、また逃げるにや。そして、白音を見つけて一緒に暮らすにや！」

『それはいい。だが、その怪我で逃げれるのか？』

「にやっ…」

「ベルトさん何かいい方法はない？」

『うーむ…シフトカーに偵察させるかい？』

「それだと、今後も逃げることに変わらないよね。なら、先手を打とう！」

思いきった発言をした

黒猫はずつとずつと逃げていた

ならば、今度は先に一手を打つ

『先手を打つと言っても居場所もわからない状態なんだ、どうやって探すんだ翔一』

「シフトカー、シグナルバイクで周囲の検索及び発見したら報告、そして誘導させる」

「そう言うけど、出てきたところをどうやって攻撃するにや？ただの人間の力にやどうすることもできないにや！」

「だからこそ力を使おう。ベルトさん？」

『今の君では危険だ！もう少し待ってから行動に移した方がいい！』

「その待つ間の時間に白音って言う子に何されるかわからないんだよ！助けられる命が手の届くところにあるのに手を伸ばさないのは違うと思うんだ」

『だが…いや、君が私を頼ることはわかっていた。その判断で君は後悔しないのかい？』

「しない…とは言い切れない…後悔は先に立たないからね…でも、目の前で苦しんでる猫を放っておいたら僕はこの先ずつと後悔しか

残らない！」

(さすが相棒だ。)

「ありがたいもう一人の僕。僕は何もできないから任せるね」

(ああ、任せろ！)

「ところで、たまに君は独り言を言うにや。誰と話してるにや？」

そういえば、もう一人の僕について話してなかった

ベルトさんはこれからパートナーとして、行動するため事情は話した

『彼は二重人格なんだ。性格を簡単に説明すると優しさと知識を兼ね備えた翔一、もう一人が強さと力を兼ね備えた翔一』

「強さと力は同じじゃないのかにや？」

「同じと言えば同じだよ。でも今回の場合は、力は腕力や脚力、具体的なもの、強さは戦略や戦い方とかの抽象的なものなんだ」

「??？」

『行きなりいわれても理解できないだろうけど、そういうことだ』

僕はネットや本で知識を深める

もう一人の僕は僕が得た知識を実践的に使う

これが僕らの関係

だから体を鍛えなくてはいけないんだよね

「まあ、僕は色々知ってるってこと！」

「とりあえずわかったにや！」

それから僕らは今後に向けた相談した

く翌日く

(眩しい…朝飯作らないと)

思い瞼をあげキツチンに進んだ

『翔一おはよう』

「ベルトさんおはよう」

リビングへ向かっている途中にベルトさんがいた

僕はベルトさんと共にリビングへ向かった

ガチャ

「黒猫も起きてたんだ、おはよう」

「翔一おはようじゃ!」

『おはよう黒猫』

「ベルトもおはようじゃ!」

僕と同じ部屋だと何かと嫌だと思ったから黒猫はリビングで休んでもらった

しっかりと満足してもらえるようにフカフカにしました

「そういえば、僕は今日学校へ行かないと行けないんだけど、黒猫はどうする?」

「うーん…外に出られないし、家の中でのんびりしてるじゃ!」

『翔一、今日一日気を付けるんだぞ!いつでもどこから狙われているかわからないんだから』

「わかってるよベルトさん!シフトカー達にもよろしく頼んどいてね」

『わかった!それとシフトスピードをもっといってくれ』

「じゃあ、朝御飯にしようか」

「そうだにゃ!」

そして、そして僕らは朝食を食べた

(これで本当に一安心だな)

僕は知らなかった黒歌達は何から逃げていたのか

夕頃

夕方は商店街は人がたくさんいる

僕とシフトスピードは夕飯の調達に来ていた

(さて、何を作ろうか…黒猫が沢山食べるからな考えないと)

(あの猫よく食うからな)

それはいわないで

「おっ！橘んところの坊主じゃないか！今日も一人か！」

「はい！いつもありがとうございます！」

この人は肉屋のおじさんだ

何時もよくしてもらってる

そうだ今夜は鍋にしよう

これならみんなで食べれるし

あ、でも黒猫は猫だから猫舌なのかな？

いや猫又だから…そんなわけではないか

そして、買い物すませ帰っている途中何かしらの気配を感じて  
いた

(相棒…この前感じた気配だ)

「えっ!?今来たの!こんな人通りの多いところに!場所わかる?!」

(俺はできるが大雑把だぞ!)

「わからないよりかはマシだよ!」

(OK!場所は…だいたいアーケード街の反対側の入り口の近くだ  
!)

「わかった!」

僕は走りだし、アーケード街を抜け近くの公園まで走った

「身長が低いと走るのに時間がかかる…ハアハア」

(でも、鍛えててよかったな。)

「それもそうだね…ハア…フウ…よし、息がととのった」

「少年よ、それで逃げ切れたと思っっているのか？」

木から翼が生えた人が降りてきた

「あなたは誰ですか？」

「少年は知らなくていいんだ。それより、黒猫を知らないか？」

(チツガキだからってなめんなよ)

黒猫と言われ何のことを指しているのか容易に分かった

「黒猫は沢山いるのでどの猫のことを指してるかわかりませんが、僕は知りませんよ?」

僕は黒猫追われている危ない奴と感じていたため僕はしらをきる



「そうか、知らないのならいい」

彼は片腕を突き出した

腕から肘、手のひらへと何かが集まっているのが感じられた

(相棒これはもしかしたらまずいぞー)

「だよね、感じてたよ」

さてどうしようか

変身するためにはベルトがいる

だけどそのベルトを今持っていない

「さて、これは少しまずいぞ」

そう考えていると、目の前に一匹の黒猫が現れた

(あんのバカ猫ー何でこんなところにいるんだ！)

「バカ猫は言い過ぎだけどここにいるのはおかしい」

「翔一もういいにや…」

「どうして!?君は嫌だから逃げてきたんじゃないの!!妹のことはいい

のかい!」

黒猫は嫌だから逃げ、機会をうかがい妹を助けようとしていたのに

「だからって…それは違うだろ「黙ってる!」」

「翔一!」

溜めていたエネルギーを撃ってきた

だけど…

変身!!!

DRIVE TAYP SPEED

「サンキューベルトさん！ちょーギリギリだけど」

『君にシフトスピードを持たせたのになんの連絡もしないからこうなっただんじやないか！』

まっそれもそうか

黒猫が来た時点でもしやおもって見たらやはりベルトさんが来ていた

今の俺はドライブ

現状は、普通のドライブではないことだ

頭は普通なのだがたすき掛けしている部分にタイヤがなくボディーカラーは黒

(これは、ゼロドライブかな?)

「ゼロドライブ?」

『プロトドライブよりも性能が低いタイプだね。今の現状で変身できた君はamazingだ!』

俺は今の現状を理解した

ドライブに変身でき、身長も設定通りだった

「さて、悪魔さんよ！生きて帰えられると思うなよ」

「姿が変わったぐらいで『SPEED』「ハア!!」グウウ!?」

シフトアップの加速にあわせ殴り付けた

それにより、数歩後ずさり3発蹴りを入れ更に後ろへとさげた

「見た目が変わったからなにも変わらないとは限らないだろ。頭悪いな。」

『翔一！普通ならないが今回ばかりは時間に制限があるぞ！』

「ああ、わかった！なら速攻で決めよう！」

ベルトさんに「頼み事をし、俺は再度加速し近づいた

「ちいさかった翔一が大きくなって戦ってるにや！どうしてにや！関係ないのどうして！」

『黒猫。彼は、守りたいんだよ。近くのを失いたくないから、手の届くところはすべて守りたがるんだよ。さあ、そろそろ finish だ!』

翔一は、イグニッションキーを捻り、シフトカーの横にあるボタンを押し、姿勢を低くした

ヒツサーツフルスロットル      スピード

「時間がないんでね!これで決めさせてもらおう!」

「その技の前に転移し、体勢をつ!」

「どうせ離れるだろうとも思って、プロトトライドロンを呼んでおい  
た!」

奴はプロトトライドロンにリアに弾かれ俺の方に飛んでくる

「ライダー………キック!!!」

左足を軸に回転し、回し蹴りをくらわせる

「ダアアア!!」

胴体に回し蹴りが当たりその場で爆散した

周囲には煙が立ち上り、周囲は見えなかった

「勝ったにや!」

『翔一!!黒猫手伝ってくれ』

なぜ今回ドライブの変身に時間制限があったか

それは、自分自身がまだ成長しきれていないため、体力筋力ともに基準値にとどいていないからである

また、変身時の身長は設定上の大きさのため、無理矢理大きくなり体力が大幅に減ったことも相まって時間制限が設けられていた